



# TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌

## 特集

# 新学習指導要領で 変わる指導，変わらない指導



### 巻頭エッセイ

ことば，コミュニケーション，異文化体験 ..... 遠山 顕 01

## 特集

新学習指導要領を受けた授業の課題 ..... 高橋貞雄 02  
 小学校外国語活動の導入で入門期がこう変わる ..... 酒井英樹 04  
 バランスをとりながら週4時間を有効に活用する ..... 佐藤 剛 06  
 「活用 (output)」力を高める英語の授業 ..... 立川研一 08  
 言語材料の取扱いの工夫 — 新学習指導要領をふまえて — ..... 山本崇雄 10

## 連載

英語教師のための基礎講座  
 個に応じた指導を重視する授業における指導案の書き方 ..... 松沢伸二 12  
 評価クリニック ライティング・テスト作成の心得 ..... 根岸雅史 14  
 授業レポート 「わかる」授業づくりを目指して(2)  
 — 「読む力」をつけるための日々の取り組み — ..... 井上志帆 16  
 小学校英語 Just Now 小中一貫教育をめざした英語教育の取り組み ..... 関口 清 19  
 単語の文化的意味 72 north/south ..... 森住 衛 21

### Essay

Building Friendships in the Strangest Places: Lessons I Learned in Japan ... Robin Sakamoto 22  
 英語教師のリソース Visual Imageの活用 — Power Point®でプレゼンを — ..... 杉本 薫 23

AROUND THE WORLD インドのことばをめぐるあれこれ [4] ..... 藤井 毅 表紙裏  
 表紙写真について 大自然とことばに国境はない! ..... 椎名紀久子 表紙裏

Vol.14

SPRING 2009  
SANSEIDO

## 現代インドの言語法制：「公用語」をめぐる

インドをはじめとする南アジアは、多言語社会である。しかしながら、そうした単純な情報だけでは、この地域の特性は十分に語りえない。そこに付加しなければならぬのは、南アジアが、主要な文字だけでも13を数える多文字社会であり、なおかつ、それらの言語と文字が、階層化して存在し、機能してきたという事実である。識字も平準化しておらず、地域と階層、そしてジェンダー(性)に対応して大きな懸隔を内包している。現在では、さらにそこにデジタルディバイド(情報格差)が、覆い被さっている。

そうしたインドだが、南アジア諸国のなかでも、最も詳細な言語法制を有することで知られている。その根幹を規定するのが、インド憲法第17編「公用語」である。実は、本邦には、その内容をめぐって大変な誤解が存在している。その代表的な例が、概説書などに見られる、インドには十数の公用語があるとする記述である。

ここでは、正確なところを記しておきたい。インドは、州を構成単位とする連邦制を取っている。公用語に関わる規定は、連邦(中央)と州のそれぞれに対応して設定されており、公用語一般が存在するわけではない。連邦レベルでは、「デーヴァナーガリー文字で書かれたヒ

ンディー語」が、単一の公用語なのである。州公用語は、各州議会において制定される州公用語法によって定められるのであって、憲法上、明示されることはない。

公用語をめぐる誤解が生み出される要因となっているのが、「諸言語」というタイトルを持つ憲法第8附則の存在である。そこには、幾度かの改正を経て、現在では22の言語が掲げられているが、それは、連邦公用語委員会に委員を送り出せる言語集団としての認知と、連邦公用語を発展させていくうえで、顧慮されねばならない言語遺産を示すにとどまる。実際のところ、附則に掲げられた言語は、連邦公用語はもちろんのこと、州公用語とも、いかなる法的関係も持っていない。ここに誤解が生じたのは、ヒンディー語に特権的な地位を与えた「1963年公用語法」をめぐる騒擾を沈静化させるために、中央政府が取った一連の妥協策によっている。

しばしば公用語であると語られる英語だが、憲法上、法案と法律、ならびに高等裁判所と最高裁判所における使用が規定されるのみである。そうであるにも拘わらず、社会的に英語が横溢するのは、植民地支配の遺制であるとともに、上述の妥協策のなかで、その残存が保障されたからに他ならない。

### 表紙写真 について

## 大自然とことばに国境はない！

椎名紀久子 Shiina Kikuko (千葉大学)

カナダの総面積は実に日本の約27倍、ロシア連邦に次いで世界で2番目に大きな国です。西側にロッキー山脈、東側にアパラチア山脈をいだし、コバルトブルーに輝く約200万もの神秘的な湖が、万年雪に覆われた連峰や氷河のあいだに点在しています。

左上の写真の景色は、ジャスパーとレイクルイーズを結ぶ、世界的にその美しさで知られるIcefields Parkwayというハイウェイの途中で撮りました。地球温暖化のせいで氷河の規模が年々小さくなっています。

1982年に二言語多文化主義が憲法で定められ、公用語は英語とフランス語になりましたが、ケベック州はフランス語のみ、10州中6州は英語のみを公用語としています。カナダ人の約57%が英語を母語とし、約22%がフランス語を、残りの約21%は中国語、イタリア語、ドイツ語などの英仏以外の言語を母語としています。先住民族である北米インディアン、メティス、イヌイットの伝統的な文化を尊重しつつ、死刑制度の廃止や基本的な医療費の無料化、社会保障制度の完備といったリ

ベラルな側面も持つ国、それがカナダなのです。

右下の写真の赤いバスはヴァンクーバー市内を陽気に走り回るBig Busという観光バスです。35カナダドルで2 Day Passを買うと、20箇所近くある市内の主な観光スポットで何回でも乗り降りできます。英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語・日本語・中国語の6ヶ国語(6 LANGUAGES)で観光スポットの説明を聞くことができます。世界中から観光客が集まり、多様な言語を母語とするカナダらしいバスですね。





## ことば, コミュニケーション, 異文化体験

遠山 顕 Toyama Ken

最初に訪れた外国はアメリカだった。1980年代初期のことで、それまでの僕といえば、職場で英語を使っていたこともあり、コミュニケーションについて、すこしは working knowledge というか、使える知識を持ち合わせていた。ただ、アメリカ人が多く乗った飛行機が、サンフランシスコ空港に着陸したとたんに機内で拍手が起こったあたりから、何かとても“異なるもの”を感じ始めていた。機の出口では、パイロットが、Good landing! と言ったりして降りていく乗客たちと挨拶や短い立ち話をしている。先程の拍手は彼のためのもので、彼は“高評”に応えるべく、そこに立っていたのだ！そこには日本的な操縦士と乗客の関係、あるいは関係のなさは存在せず、それが異文化の入口にいる僕に強い印象を与えた。この水平な感覚を、僕はすぐそのあとの通関時にも感じるようになった。

僕の前のビジネスマンがアタッシュケースの中の商品サンプルについて、係官から大声で執拗な質問を受けている。と、別の列が空き、係官がこちらへというジェスチャー。で、そこへ行き、パスポートを見せる。You're a Leo, huh? (獅子座なのかな?) と係官。Yes, I am. (そうですか) と僕。Me, too. (私も) と係官。You are? (そうですか) と僕。パスポートを返し Enjoy San Francisco. と係官。Thanks. と僕。通関は終わり、何とも明るい気分で出口へ向かった。本国人用の通関を先に済ませた友人たちに話すと、ヒッピーのメッカらしいことだ、他の空港ではそうは行かない、とのコメントが出た。

そのあと僕が体験したことも、目新しいことが多かった。他人同士で目が会ってチラと浮かべるスマイルや Hi. の挨拶。買い物客とレジ係が交わす

Hello. や、赤の他人に接触するのを避けるために使う Excuse me. など。そしてレストランでの、水が欲しいですか？メニューが見たいですか？挽きたての胡椒が欲しいですか？友人たちからの、町を見たいか？もっとここにいたいか？休みたいか？云々の Do you want (to) / Would you like (to) ナニナニ？の嵐が続く！黙って水を注ぎメニューを出せ、案内は任せるからいちいち訊くな、と心の中で思ったものだ。あとでそれらの質問が、相手の自由意志を尊重する気持ちの表れであり、相手の気持ちを察するのでなく、相手の意志を尋ねることが礼儀なのだ、と気付いたのは、やはりこの時のインパクトのおかげだったと思う。「以心伝心」という僕の文化背景に、「以言伝心」とでもいうべきものが加わった。後に米国人と結婚した僕に、「以言伝心」の嵐は強まるのだが、それはまた別の機会に思う。

上下の意識は、縦社会といわれる日本のみでなく、どの国にも存在するものだけれど、この初の異文化の旅で、横への意識、水平に並ぼうとする意志や建前も存在する社会に、目をすこし開くことができた。

あれから 30 年近くになるが、異文化接触の際に、無闇に衝撃や嫌悪を覚えないための「言葉構え」、といったものも携えて旅立ってもらえるよう、今年も英語を教えていければと思っている。

### 遠山 顕

東京外国語大学英米語科卒、テンプル大学大学院修了。コミュニケーションを中心に据えた「話学」を教える。NHK「ラジオ英会話」講師、コミュニカ代表。近刊「Hi! 英語井」(朝日新聞出版)。和英琵琶一人芝居、日米映画「The Ramen Girl」など、俳優としても活動している。

# 新学習指導要領を受けた授業の課題

高橋 貞雄

(玉川大学)

## 1. 改訂の背景とポイント

学習指導要領はほぼ10年ごとに改訂されてきたが、時代を映す鏡といえよう。その時代時代のニーズが学習指導要領を変革し、またその学習指導要領がその後の教育をリードしていく。たとえば、外国語でいえば、「コミュニケーション」という文言がはじめて入ったのが平成元年の学習指導要領であり、それは次の学習指導要領では「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション」となった。そして今回の学習指導要領では「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション」となった。こうした外国語の目標の1フレーズは教育観や授業観に大きな影響を与える。

今回の改訂は、教育基本法の改正を踏まえた改訂であることと、いわゆる「ゆとり教育」を再検証した上での改訂であることが注目すべき点である。教育基本法の観点では、引き続き「生きる力」が強調されている点と、伝統文化や自然科学が新たに加わっている点が注目される。ゆとり教育に関しては、学習内容の3割削減という掛け声とともに、ゆとり世代という流行語にも似たことばを生み出したほど影響力のある政策であった。今回は「確かな学力」を育成することが大きな柱であり、今後の授業や教材のあり方を考えていく上で、重要な課題になる。

## 2. 外国語教育に寄せられる期待と責任

新学習指導要領が出る前に、英語教育に大きなインパクトを与えた政策がある。それは平成14年に示された「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想とそれを受けて平成15年に示された「英語が使える日本人」の育成のための行動計画である。

その中で、日本人に求められる英語力が具体的に示され、同時に授業の改善を含めた英語教育改善のためのアクションが謳われている。これは国際社会を生き抜く上で、外国語能力とりわけ英語力が重要なキーであることを示していると同時に、外国語能力を担保するための政策の必要性を示している。

この点で新学習指導要領が出した1つの答えは現行の週3時間から週4時間体制への移行である。これにより外国語は各学年とも年間140時間が確保されることになる。すべての学年で週4時間付与されている科目は外国語のみであり、それだけ期待が大きいということになる。その分、教科外国語は責任が重く、成果が具体的に出ない限り、批判の矢面に立たされることは覚悟しておくべきだろう。問題は4時間の使い方である。ある程度のゆとりを持って基礎学力の育成に当てるのか、内容を掘り下げて教えるのか、それとも「英語を使う力」を育成するための活動を今まで以上に多く取るのか、といったことである。

## 3. 小・中の連携

現在でも、地域差はあるものの小学校の95%以上が英会話を含めた活動を行っている、とよく言われる。こうした活動は主として「総合的な学習の時間」を利用して行われている。新学習指導要領では、小学校に「外国語活動」の時間が導入され、第5学年と第6学年に週1時間、年間35時間が配当されることになった。すでに本年度から拠点校を中心に「英語ノート」の試作版が配布され、今年度中には全小学校に配布される運びである。ただし、英語ノートは検定教科書ではないので、どう活用するか、あるいは活用しないかを含めて今後の検討課題である。



中学校の学習指導要領において、従来は4技能のすべてにおいて「慣れ親しむ」とされていた目標のうち、聞く・話すについては小学校段階におろされることになった。そして、中学校の第1学年における言語活動として「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する一定の素地が育成されることを踏まえ」た活動が期待されることになる。そのため、中学校の入門期の指導をどうすべきか、どの段階から始めるべきか、今まで以上に腐心しなければならない。小・中のスムーズな連携は望ましいこととして、小学校で育んだ芽を中学校で摘んではならないし、小学校の外国語活動が中学校の足を引っ張るようなことがあってはいけない。

#### 4. 学力の育成

学習指導要領改訂のポイントの1つとして、「確かな学力を確立するために必要な時間を確保する」ということが謳われている。学力に直接結びつくのが語彙である。現在は900語程度の語彙で教科書が編まれているが、今度は1,200語程度に増え、さらに連語も増強されている。つまり授業時間数が増えた分だけ単語数も増えたということである。これは学力やコミュニケーション能力を育成する上では大きなプラスになるが、学習量が増えるという点では生徒の負担が増すことになり、教科書の編集にとっても工夫の必要がでてくる。つまり、語彙指導は従来と同様でよいかという意味での再検証が必要である。

また文法については大きな変更はないものの、関係代名詞のように、理解の段階にとどめる、といった歯止めがなくなっている。この点はあまり問題ではなく、むしろ関係代名詞を使って Show & Tell を行うといった、実践的な活動が可能になるだろう。

むしろ留意すべきは、「文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること」と明記されている点である。つまり、文法を知識として学ぶのではなく、文法は活用するための手段であるという認識が必要である。例を挙げていえば、不定詞の名詞用法は将来の夢について述べる手段であり、実際にそれを活用して言ったり書いたりする経験を

行わせることが従来に増して必要になってくる。

そして学力育成の観点で特筆すべきもう1つの点は、学習内容を定着させるためには繰り返し指導することが必要である、ということである。学習項目を単に積み上げ式に指導するのではなく、たとえば第1学年で学んだことを第2学年でも繰り返し指導することが求められている。この点は授業研究においても、教材編集においても重要な課題である。

#### 5. 総合的な指導と統合的な指導

次に重要なことは言語活動と4技能の関連である。新学習指導要領では、4技能をコミュニケーション能力の育成という観点から述べているが、総合的な指導と統合的な指導という側面ではやや分かりにくい。筆者は次のように理解している。総合的な指導とは4技能をバランスよく指導することである。このことはすでに述べたが、「目標」のところで4技能が併記されているところに端的に表れている。また、教材に関して、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成する」と述べられている。一方、統合的な指導とは、何らかの最終的な目標に向かって複数の技能を使って言語活動を行わせることである。たとえば、「聞いたり読んだりしたことについてメモをとったり、感想、賛否やその理由を書いたりする」といった記述があるが、この場合には聞いたり読んだりする活動と書く活動が統合的に結びついている。もっとも、感想を書いたりするために必要な文法や語彙は言語材料の入り口の活動として十分に練習しておく必要がある。

今後はアウトカムが今まで以上に求められるようになる。学習した結果として何がどこまで出来るようになったのかについて説明責任を果たす必要がある。学習環境や生徒が多様化する中で、教師は今まで以上に指導力・授業力を磨くことを求められるだろう。さらに、新学習指導要領において「学習意欲の向上や学習習慣の確立」「豊かな心」が重視されている点も見逃せない。学校教育は生徒の人間的な成長のためにあるのであるから、生徒の学習の動機付けになるような、あるいは生徒の心を揺さぶるような教材も提供しなければならない。

# 小学校外国語活動の導入で入門期がこう変わる

酒井英樹

(信州大学)

## 1. はじめに

本稿では、小学校「外国語活動」と中学校「外国語」の関係から学習指導要領を紹介しながら、中学校の入門期がどう変わっていくかを考えていきます。

## 2. 「外国語活動」と「外国語」の関係

新学習指導要領において、小学校5・6年生で週1時間の「外国語活動」(英語を取り扱うことが原則)が新設されることになりました。教育課程上、教科として位置づけられていない外国語活動と、教科の1つである中学校の外国語の関係をどのように捉えたらよいのでしょうか。小学校の外国語活動の目標は、「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」(以下、下線は筆者による)となっています。下線部分が中学校の外国語の目標と異なる文言ですが、基本的には外国語活動と外国語の目標は類似しています。これは小学校と中学校の接続を意識したものと考えてよいでしょう。

小・中学校の接続については、中学校の外国語の、第1学年の指導に当たっての配慮事項に、「小学校における外国語活動を通じて音声面を中心としたコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえ」と明記され、また、学習指導要領公示に伴って出された通知には、小・中学校の主な改善事項に「外国語教育の充実」が挙げられ、その中で「小学校高学年に外国語活動を導入したこと」に触れられており、「外国語活動」は「外国語」につながる時間であることがわかります。

## 3. 言語や文化に関する体験的な理解

小学校学習指導要領・外国語活動では、言語や文化に関する体験的な理解に関し、指導する内容として、(1)「外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさに気付くこと。」、(2)「日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。」、(3)「異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。」という事項が挙げられています。

外国語活動の補助教材である『英語ノート(試作版)』には、言語や文化に関する活動や題材がたくさん扱われています。例えば、バナナという外来語が英語ではどういう音になるのか注意させるような活動があります。音声を聞いたり、発音したりしながら、「日本語と英語の音声って違うんだな」と体験的に理解するわけです。また、数えるときの記録方法として、日本では「正」の字を書きますが、アメリカでは4本縦線を引き、最後に斜線を左上から右下に引く方法をとります。中国や韓国ではどんな方法をとるのでしょうか。実際に、それぞれの方式で数えながら、中国や韓国では「正」の字を使うという共通性や、アメリカは異なる方法をとるという文化の多様性を体験的に理解していくことになります。

小学校で体験的に理解したことを踏まえて、中学校では、さらに「公正な判断力」や「豊かな心情」、言語や文化を「尊重する態度」、そして「国際協調の精神」を養うことを目指すことになります。

## 4. 音声や基本的な表現に慣れ親しむこと

中学校外国語の「各言語の目標」に関して、現行

学習指導要領は「英語を聞くことに慣れ親しみ, 初歩的な英語を聞いて相手の意向などを理解できるようにする」と「英語で話すことに慣れ親しみ, 初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにすること」でしたが, 新学習指導要領では下線部分が削除されました。つまり, 英語を聞く話すことについては, 小学校の段階で「慣れ親しむ」は達成できているということを示しています。

## 5. コミュニケーション・言語の使用場面と働き

言語の使用場面と働きが, 現行中学校学習指導要領において導入されました。新学習指導要領において, 言語の働きで, その分類の仕方に変更が見られます。3分類であったものが, (1) コミュニケーションを円滑にする, (2) 気持ちを伝える, (3) 情報を伝える, (4) 考えや意図を伝える, (5) 相手の行動を促す, という5分類になっています。

この分類は, 外国語活動における「コミュニケーションの働き」と対応しています。外国語活動では, 内容の取扱いの配慮事項として, 「言葉によらないコミュニケーションの手段もコミュニケーションを支えるものであることを踏まえ」と書かれています。つまり, 小学校では, コミュニケーションにおける働きを理解したり, その働きを(言葉によらずとも)果たしたりすることができる力や, これらの機能を積極的に果たそうとする態度が育成されると考えられます。例えば, 児童が How are you? と尋ねられたとします。ある児童は, I'm sleepy. と文を表出して自分の気持ちを伝えるかもしれません。あるいは, Sleepy. と単語だけで表現するかもしれません。別の児童は, 表情やジェスチャーをして I'm sleepy. ということを伝えるかもしれません。これらの児童が「自分の気持ちを伝える」というコミュニケーションの働きを積極的に果たそうとしている態度が重要です。このように, 小学校では, 微笑んで「コミュニケーションを円滑にする」という働きを遂行したり, 手を引いて道案内をして「相手の行動を促す」という働きを果たしたりするなど, 言葉によらないコミュニケーションであっても積極的に図ろうとする態度の育成が目標とされています。言葉によってこれらの働きを果たす力を身につけるのは,

中学校の段階であると考えられます。小学校において「手を引いて道案内をする」という積極性が素地となって, 中学校では Go along the street to the station. や Turn left at that corner. といった英語表現を使って道案内をするコミュニケーション能力の基礎が育成されるということになるわけです。

## 6. 入門期がどのように変わるか

では, 中学校入門期における指導がどのように変わっていくのでしょうか。まず, 音声から文字へとという指導の流れがますます基本となると思います。小学校「外国語活動」において, ALT・学級担任・英語専科教員の英語や, CD・DVDなどの英語に触れ, 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しんできます。聞かされる英語のすべてを理解できなくても, (1) 非言語的情報, (2) 既存の一般的知識, (3) 既習の英語知識, などを手がかりにし, メッセージを大体理解する力を身につけてきます。そのような生徒には, 日本語ばかりの一方的な講義調の授業ではなく, 音声を十分に使いながら, 英語を正確に理解する力に発展させたり, 音声から文字への橋渡しをスムーズに進めたりすることが必要になると考えられます。

次に, 表現や語彙によって導入方法や指導方法を変えていく必要があると考えられます。『小学校外国語活動研修ガイドブック』によれば, 『英語ノート』で取り扱われる主な語彙に約340語挙げられています。これらの外国語活動で扱われる語彙や表現と中学校で初めて触れる語彙や表現の間で指導方法が一緒であることは, 効率がよくありませんし, 生徒の学習意欲を減退させる可能性もあります。また, 中学校では, 言語材料の取扱いとして, 「発音と綴りとを関連付けて指導すること」とされています。生徒が英語の音声にどの程度慣れ親しんでいるかを見極めながら, 発音と綴りの関係の指導が求められます。

## 7. おわりに

各小学校において実践内容が異なることも予測されます。小学校外国語活動で, どのような活動を通して言語や文化に対する体験的な理解を深めてきたか, どのような英語の音声にどの程度触れてきたか, 小中学校の情報交換が不可欠になるでしょう。

# バランスをとりながら週4時間を有効に活用する

佐藤 剛

(青森県弘前市立常盤野中学校)

## 1. はじめに

教員になって以来、大学や研究会で得たことを実践しようとしてきたが、週3時間という限られた時間のなかでは、教科書の内容を終えるのが精一杯であり、経験的には、次のように指導が偏る傾向にあったように思う。

- ① コミュニケーション活動ばかりやって基礎がおろそかになるパターン
- ② とりあえず基礎を押さえようとするパターン

①は、いわゆる正確性 (accuracy) より流暢さ (fluency) を大事にするパターンで、教員になりたての頃の私の状況である。当時は、スキット発表、英語の歌、映画など、面白そうな活動を片っ端から授業に導入した。もちろん生徒は、はじめのうちは面白がってやるし、授業は盛り上がるが、話している英語はブロークンなことが多い。さらに、表現に広がりがなく、時間が経つにつれ生徒のノリは悪くなる。野球に例えると、とにかく実践、練習試合あるのみ。キャッチボールもできない生徒が試合を楽しんでできるだろうか？

②は、英語を指導できる時間は非常に限られているので、それならば、せめてドリルや繰り返し練習、基本文の暗唱などの基礎練習だけはしっかりとさせたいというパターンで、受験生を担当した昨年私の状況である。確かに基礎力がつくが、何のために英語を学習しているのかという目的を持たせるのが困難である。野球でいえば、素振り、キャッチボールの練習ばかりで、その成果を試す試合がないような状況である。

それでは、週4時間になることでどのような可能性があるのかを考え、具体的な活動例を紹介したい。

## 2. 週4時間になることで

週4時間になることのメリットは、ずばり「バランス」であると考えている。すなわち、基礎・基本の習得と、それを実際に活用、実践してみる発表活動や自己表現活動のバランスが、よりうまくとりやすくなることである。具体的には、ドリル的な活動や既習事項の復習など、しっかり基礎・基本をおさえたと上で、発表活動へ移行することができる。このように、基礎練習から発表活動へ至る段階でさらに細かくステップを踏むことにより、各段階間のスムーズな橋渡しが可能になり、基礎・基本の活動、実践の活動の両輪がしっかり機能すると同時に、つまづいている生徒への対応も可能になると考えられる。

それでは授業の流れにそったかたちで、何点が活動を紹介したい。復習の活動としては、毎時間 dictation を実践したい。これは、1年生は前の学期の教科書の範囲、2年生は1年生の範囲、3年生は1・2年生の範囲というように、既習の教科書を使った復習活動である。範囲を事前に連絡し、授業が始まると同時に教師のあとについて生徒と一緒に音読し、次に、生徒は教師の音読を聞き、音読を止めた最後の文を以下の dictation card に書き取る活動である。

Dictation Card	
Date	Name

1年生の頃から徐々に慣らしていくことで、練習さえしてくれば、すべての生徒が取り組める活動とし



たい。生徒は自分がどこでつまづいているのかを実感できるし、また、音読への意識づけをすることもできる。

単語の導入は、現在、フラッシュカードを利用し、発音、意味の確認、発音練習をするのみであるが、特に発表語彙のレベルまで高めたい語彙については、次のように、それぞれの語彙を短文のなかで提示したり、生徒とインタラクションしたりと、さらに細かいステップを踏み、習熟を図りたい。

[先生] Enjoy. I enjoy studying English.

[生徒] I enjoy studying English. (リピート)

[先生] Oh! Really? Do you enjoy studying English? Mr. (Ms.) ○○?

このようなインタラクションにより、文脈をともなった理解や、また、単語が文のなかでどのように使用されるのかという理解が可能となり、よく生徒が起こしがちな English is enjoy. (英語は楽しい) などのようなエラー防止にもつながるであろう。

実践の活動としては、音読練習の際に「置換モード」を取り入れることが有効である。これは、以下の例のように英文の特定の箇所が日本語に置換された状態の文章を英語に直しながら読む活動である。

例) Did you (好き) today's (昼食)?

Yes, I did. I (好きだった) the (カレーライス).  
(NEW CROWN 2 Lesson 1 Section 2)

音読については、以下のように、教科書本文の語句を変えて、自分のことについて読む(話す)活動(セルフリーディング)からスキットの発表につなげることもできる。

例) A: Did you like today's lunch?

B: Yes, I did. I liked ramen.

(NEW CROWN 2 Lesson 1 Section 2)

また、ピクチャーカードや教科書の絵について、英語で表現できることを単文単位でどんどん発表する picture description から、それを組み合わせる形で、まとまりのある文章で教科書の内容を英語で発表する reproduction につなげたい。これらの活動を音読のあとにもうけることで、何のための音読練習なのかという、目的意識を生徒に持たせることが可能となる。

まとめの段階の活動においても、ただ基本文を練

習して終わりではなく、以下の write-around のような活動を実施したい。これは、1人目の生徒が(1)アメリカ出身の生徒ができそうなこと(例: I can speak English.)と(2)次の生徒の出身国(例: I'm from China.)を記入し、次の生徒にまわす、2人目の生徒は、前の生徒の内容を受けて、(1)できそうなこと(例: I can cook gyoza.)と(2)次の生徒の出身国を記入するというようなグループワークである。

前後の話が合うように、下線部に英文を、  
( )に国名を書きなさい。



Student A : I'm from USA.

I can \_\_\_\_\_.

Student B : I'm from ( ).

I can \_\_\_\_\_.

Student C : I'm from ( ).

I can \_\_\_\_\_.

あなた : I'm from Japan.

I can \_\_\_\_\_.

先生 : OK. I see.

これにより、学習している文型の形式、意味、使用の習熟や、話の流れを意識して英文を書き、また、自分の書いた英文を相手の人が読むことで、文脈を意識したライティングが可能となる。

### 3. 終わりに

週3時間という時間数のなかでは、限られた時間を何とか有効に活用しようと、内容の精選、ペアやグループワークなどの学習形態の工夫による指導の効率化、授業と家庭学習の効果的な結びつけなど、様々な工夫がされたことは事実である。それらの工夫を生かしつつ、生徒の英語をモニターすることで、英語の習得に、より効果的な授業の組み立てやあり方を工夫していきたい。

#### 【参考文献】

静哲人(1999).『英語授業の大技小技』. 東京. 研究社.  
Larsen-Freeman, D. (2001). Teaching grammar, in Celce-Murcia, M. (ed.) *Teaching English as a Second or Foreign Language*, 251-266, Boston: Heinle and Heinle.

# 「活用 (output)」力を高める英語の授業

立川 研一

(大分県玖珠郡九重町立野上中学校)

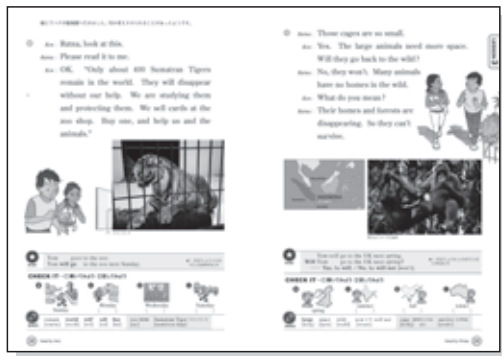
## 1. はじめに

新学習指導要領のキーワードともなっている「習得」と「活用」とは、端的に言えばinput活動とoutput活動のことだと言える。また、inputした学習項目を、「使いこなせる状態 (intake)」にまで高める活動、つまり「習熟」のための活動が、2つの間をつなぐ大切な学習活動となる。

学習者に英語によるコミュニケーション能力を身につけさせるためには、この「習得 (input) ~ 習熟 (intake) ~ 活用 (output)」の3つの段階を、授業の中に計画的に、しっかりと仕組んでいく必要がある。また新学習指導要領の趣旨をふまえ、「読む」「聞く」「話す」「書く」の4つの技能を育てる活動をバランスよく授業に取り入れていくことが今後ますます求められる。

## 2. 「活用 (output)」力を高める授業設計

input-intake-output を意識し、4技能をバランスよく取り入れた授業とはどのようなものであるか。以下に、NEW CROWN English Series 2 Lesson 3 を題材に、筆者が行った授業の実践例を示す。



本課では、動物園に保護されている絶滅危惧種の動物や環境破壊の問題などが扱われており、その中で助動詞 will を使った未来形の文や、接続詞 when の用法を学習するように構成されている。教科書本文には、消滅しつつある森林、動物園の中で生き残っているスマトラ虎の現状が語られており、挿絵には、今のところ自然の中に住んでいるが徐々に森林が失われ、住処を追われつつあるオランウータンの親子などが取り上げられている。

内容的に非常に考えさせられるものではあるが、読解しただけではなかなかすぐに output 活動にはつながりにくい内容でもある。そこで、この課の学習の最後に、“Are the animals in the zoo happy or unhappy?” という疑問に答える「意見文」を書かせ、口頭でそれを発表させるという活動に取り組みせようと考えた。そして、それに向けて input 活動や習熟活動を仕組むことにした。

## 3. output 活動に向かう input 活動

授業ではまず、機械的なドリルやパターンプラクティスを通して、助動詞 will の理解と習得 (input) を図った。さらに「たれば連想ゲーム」(『Talk and Talk』, 田尻悟郎著, 正進社) に取り組ませることでその習熟をねらった。

「たれば連想ゲーム」とは、1人目の書いた文の主節を次の文の従属節とし、しりとり的な要領で文をつないでいくゲームである。

例) If I go to America, I will go to New York.  
→ If I go to New York, I will watch baseball games.  
→ If I watch baseball games, ....

4人班でいくつ文をつなぐことができるか競わせた

り、班で協力して4つめの文にオチをつけさせたりするなど、様々な形で取り組ませた。

この活動を通して、学習者はwillを使った文を作ったり、それを現在形にもどしたりするなどの操作を楽しみながら体験することができると共に、自分の考えたことを英語で表現する楽しみや自己有能感も味わうこともできる。そして何よりこの活動の本当のねらいは、後のoutput活動の中に活かしていくことができる点にある。「もしも～ならば、…であろう」という文型は、「もしも森林がなくなれば…」などといった形で意見文に用いやすい。ゲーム感覚で何度も口にした文型を、後に自己表現の手段として役立てることができるという点で、この活動は非常に重要な習熟活動なのである。

自分の意見を書く活動では、初め各自で意見を書かせた後、4人班でそれぞれの意見を持ち寄せ、互いに吟味させあいながら、最終的にgroup opinionという形にまとめさせた。さらにALTの前でその意見を口頭発表させ、ALTからの質問に答えるという活動へとつなげていった。以下に生徒の作った意見文をいくつか示す。

- We think Orangutan and Sumatran tiger are not happy, because their homes and forests are disappearing. So they can't survive. And cages are so small. If their homes and forests come back, they will be happy.
- I think Sumatran Tigers are happy. Now their homes and forests are disappearing. If they live in the wild, they won't survive!!!!
- We think Sumatran Tigers are not happy, because Sumatran Tigers can't run in the cage. But if Sumatran Tigers live in the forests, Sumatran Tigers will disappear. If people don't kill forests, forests won't disappear. If forests don't disappear, they can go back to forests. Then they will be happy.
- We think that Sumatran tigers aren't happy. Because they don't have freedom. But we think that they are happy too. Because we are helping them. They can't survive in the wild without our help.

「たれば連想ゲーム」で学んだ文型に教科書本文の表現をあてはめたり(下線部)、教科書とほぼ同じ文であるが、独自の文脈の中で使用することで自分の言葉としたりしている例が多く見られる。学習活動の中でinputされた項目や教科書の本文などがintakeされ、学習者自身の言葉として活用(output)する力が育ったのではないだろうか。

また、この学習を終えた後の生徒の感想文には、「自然の中で暮らす動物も大変なんだなあということを実感した」「自然を守るために、今自分ができることも考えていかなければならないと思った」などの記述が多く見られた。英語を使ってoutputしようとする活動を通し、結果的に生徒は何度も教科書本文に立ち返ることとなり、自然に本文内容の読解も深まったのではないかと考えている。

なおこの次の単元(不定詞)では、“行きたい国とその理由”を自己表現するoutput活動、「夏休み夢の旅行」に取り組ませた。出来上がった作文の中には、不定詞の3用法はもちろんであるが、if節を伴った未来形の文章も多数用いられていた。1度output活動を通して身につけた表現は、生徒の中に確実に定着していることがうかがえた。

#### 4. おわりに(教師に求められること)

1つ(または複数)の単元を通し、その最後にどのようなoutput活動ができるような力を生徒につけたいのか、明確な目標意識を持つことがこれまで以上に強く教師に求められると考えている。またそれに向けて、反復的、戦略的かつ魅力的に授業を組み立てていく「授業デザイン力」がますます重要になっていくであろう。

そのためにも、単元やレッスン、教科書本文などが、どのようなoutput活動ができるように構成されているのか、教材の価値を見抜く眼力や、教材と教材を組み合わせより効果的な学習活動を仕組んでいくなどを一層高めていきたいと考えている。教師もまた学び続けることで、生徒とともに成長し続けたいものである。

#### 【参考文献】

大分大学教育福祉科学部附属中学校研究紀要第54集。田尻悟郎(2000)。「Talk and Talk Book 2」。正進社。

# 言語材料の取扱いの工夫

## — 新学習指導要領をふまえて —

山本 崇雄

(東京都立両国高等学校附属中学校)

### 1. 新学習指導要領での言語材料の取扱い

新学習指導要領では、言語材料の取扱いの項目で、次のような留意点があげられている。

- ア 発音とつづ<sup>つづ</sup>綴りとを関連付けて指導すること。
- イ 文法については、コミュニケーションを支えるものであることを踏まえ、言語活動と効果的に関連付けて指導すること。
- ウ <略> 文法事項の取扱いについては、用語や用法の区別などの指導が中心とならないよう配慮し、実際に活用できるように指導すること。また、語順や修飾関係などにおける日本語との違いに留意して指導すること。(下線は筆者)
- エ 英語の特質を理解させるために、関連のある文法事項はまとまりをもって整理するなど、効果的な指導ができるよう工夫すること。

現行の指導要領と比較すると、ア、イ、エの項目が新設され、ウの項目では下線部が追加変更されている。これらをすでに留意して授業をなさっている先生方も多いと感じるが、改めて、授業の中でどう実践していくかについて述べていきたいと思う。

### 2. ルールはコミュニケーションを支えるもの

発音と綴りの関係や文法は、英語を運用していく上でのルールである。そして、これらのルールは『コミュニケーションを支えるもの』であることが強調されている。つまり、ルールだけで終わることなく、コミュニケーションに結びつけていく授業が求められると言える。また、関係代名詞などで適用されていた『理解の段階にとどめる』といった表現が削除され、どの文法事項についても積極的に発信させることを意識する必要がある。

また、視点を変えれば、コミュニケーションだけを重視するのではなく、ルールもしっかり指導してほしいとのメッセージも強い。これからの授業では、コミュニケーション能力の向上を目指し、ルールも関連づけて、しっかり指導していくバランス感覚が求められる。

### 3. 目指すのはコミュニケーション能力の育成

これらをふまえ、授業を構成する上で大切なのは、「生徒にどんな力をつけさせたいのか」という視点である。あくまで、目指す頂点は、コミュニケーション能力の育成であることは忘れてはならない。したがって、生徒には、まず英語を通してコミュニケーションできることの喜びを伝えたい。コミュニケーションのスタートは「伝えたい」「理解したい」という気持ちである。相手に気持ちを届けたり、相手の気持ちを理解したりする手段の一つが英語であり、それを支えるものがルールである。伝えたい気持ちが強ければ、多少の発音や文法の間違いがあってもコミュニケーションは成立する。「間違いを恐れず」という姿勢は大切にしたい。さらに、もっと正確に伝えたい、もっと説得力を持って伝えたいと思ったときに、発音、綴り、文法の正確性の大切さに気づく。そんなトップダウンの考えを授業の中で大切にしたい。

### 4. 発音と綴りの関係について

発音と綴りの関係では、フォニックスや発音記号の利用など、様々な指導法がある。これらは、ルールの指導であり、あくまでも『コミュニケーションを支えるもの』である。ルールを覚えさせることに固執してしまったら、本末転倒である。また、多す



ざるルールも生徒に負担になる。生徒が必要とするときに、必要なルールを示すタイミングが大切である。

『発音と綴りを関連付けて指導』していくには、まずフラッシュカードを使用することを大切にしたい。カードをフラッシュさせ、単語の綴りの全体像を見て、素早く発音させるトレーニングをさせると、たいていの単語は発音できるようになる。その中で、適宜フォニックスのルールなどを教えていくこともできる。

問題は、綴りを書かせることである。「読めても、書けない」という壁を越えていくには、もう一工夫必要である。フラッシュカードの練習の際、綴りを空中に指で書かせると、綴りへの意識が高まる。また、教科書本文を様々な方法で繰り返し書かせる工夫もできる。ただ「教科書の文や単語を書きなさい」と指導するだけでなく、教科書本文のディクテーションをさせたり、教科書本文をリプロダクトさせて内容を紹介する英語を書かせたり、感想を書かせたりするなど、バリエーションを持たせると、生徒は飽きずに繰り返すことができる。

## 5. 文法の基礎は教科書で鍛える

文法を『実際に活用できる』ように指導していくためには、言語の使用場面や意味を理解させることが肝要だ。そのために、教科書を最大限活用することをおすすめしたい。教科書は場面設定がしっかりしており、補助教材として、ピクチャーカードやDVDなどの視覚的教材も充実しているからである。視覚的教材は、場面や意味を理解する上で大きな助けになる。これらを活用し、教科書の理解を進めていく仕上げとして、私は教科書本文の内容について、絵を使ってプレゼンテーションする活動(Oral Presentation)を行っている。教師が行うOral Introductionを生徒が行うイメージである。その中で、自分の感想や考え、聞き手への質問などを入れていく。教科書本文を読んで、理解し、自分の言葉でプレゼンテーションする。内容を第三者に伝えるためには、教科書の内容をよく理解していないとできない。教科書本文に何度も触れていくことによって、使われている文法事項に対する理解も深まって

いく。表現ができるようになったら、書かせることに挑戦させたい。『語順や修飾関係などにおける日本語との違い』を意識させるには、語順正誤問題が効果的で、小テストや定期テストなどで継続的に取り組ませたい。

さらに、ペアワークなどの言語活動で、教科書以外の使用場面での練習を組み合わせると、表現の幅が広がり、運用能力の向上が期待できる。このように文法は、『言語活動と効果的に関連付けて』指導していきたい。

ある程度言語活動で文法に対する理解が深まったら(教科書でいうと各レッスンの終わりなどで)、様々な文例に触れさせ、『関連のある文法事項はまとまりをもって整理する』ことにより『英語の特質を理解』させていきたい。教科書本文の場面や言語活動の場面から広げていき、様々な場面で使われている文例に発展させていくと、効果的に理解が深まっていく。本校では、副教材に*Basic Grammar in Use with Answers: Self-study Reference and Practice for Students of English* (Cambridge University Press) を使用し、文例をノートにまとめさせている。この本には様々な自然な文例が豊富にある。ノートの左側に英文を書き、右側に日本語訳を書いていく。多くの自然な文例に触れると、文法事項に対する理解が深まっていく。

## 6. 繰り返し、そして挑戦していく授業

文法を『活用できる』ようにしていくには、何度もスパイラルに繰り返し指導していくことが大切である。ここでも、教科書を活用し、3年生になっても1年生の教科書の内容を即興でプレゼンテーションさせたり、ディクテーションなどで毎時間書かせたりするとよい。また、特に代名詞、動詞の活用、時制、単数形・複数形などについては、授業の中でSmall TalkやTeacher Talkに計画的に入れていき、何度も繰り返し定着させていく工夫が必要である。

そして、『理解の段階にとどめる』『基本的なもの』といった表現が新学習指導要領で削除されたことによって、さらに活動のバリエーションを広げ、様々な自己表現活動に挑戦していく姿勢が大切である。

\*『』は学習指導要領における文言を示す。

# 個に応じた指導を重視する授業における指導案の書き方

松沢伸二 Matsuzawa Shinji  
(新潟大学)

## 1 はじめに

中学生も1年生2学期になると、学習内容の習熟の程度に個人差が出るようになり、個に応じた指導 (differentiation) を重視する必要が生じる。右のページに示したのは、(習熟度別学級編成をしていない)一般クラスでの授業用に、「このように書くと、個に応じた指導がより確実になる」という考えでまとめた指導案の書式である。以下にその意図と書き方を説明する。(なお、1. クラスの実態、2. 本時の位置づけ、3. 本時の目標、は省略してある。)

## 2 「本指導過程の目標」にコアと発展を書く

授業の目標は一般に、外国語を学習するための能力などが「平均的な学習者 (average learner)」を対象に1種類設定される。(筆者は学生時代に、「目標は5段階相対評価で、評定3の生徒を想定して書くように」という指導を受けた。)例えばライティングの領域での目標は、「セリーヌ・ディオンへの手紙(ファンレター)が書ける」のように設定される。

しかし、中学や高校のクラスには外国語の学習が「得意な学習者 (more able learner)」が存在する。こうした学習者には上記目標に到達後、さらに高度な目標(「セリーヌ・ディオンを招待するための、交渉内容が書ける」などの発展目標)に取り組みせ、タスクや成果による個に応じた指導を行いたい。

このとき教師は、平均的な学習者と得意な学習者の両者に到達を期待する目標を「コア目標 (core objective)」に、得意な学習者にさらに到達を期待する目標を「発展目標 (extension objective)」に設定し、それを指導案の「a. 本指導過程の目標」の「コア」と「発展」に分けて書くことで、個に応じた指導をより確実に実施できる。

## 3 「教師の働きかけ」に4種類の活動を書く

学習者の適性・能力、興味・関心、性格などは実に様々である。そのため一般的なクラスには、先の平均的な学習者と得意な学習者に加え、外国語の学習が「苦手な学習者 (slow learner)」も存在する。外国語教育で個に応じた指導を重視する授業はしたがって、この3種類の学習者それぞれに適切な活動に取り組みせて、各学習者の習得レベルを最大限に引き上げようとするものである。

これを授業の指導過程で考えると、Warm-up, Review, Presentation, Practice, Production までは、クラス全員がコア目標に到達するために、同一の「コア活動 (core activity)」に取り組む。続いて、Productionの後の活動として、平均的/得意/苦手な学習者が、Productionの目標の到達の程度に応じて、さらに異なる目標に到達するため、各自が別々の課題に取り組むことなどが考えられる。

平均的な学習者はこの時、練習を繰り返して習熟を強固にする「補強活動 (reinforcement activity)」に取り組む。これにはProductionのコア活動と同様の活動(「別の歌手にファンレターが書ける」など)を用いる。得意な学習者は一方、発展目標に到達するための「発展活動 (extension activity)」に取り組む。これはProductionでのコア活動より高度な活動(先の「交渉内容が書ける」など)である。最後に苦手な学習者の場合は、Productionの活動などでコア目標に到達できなかった際の「治療活動 (remedial activity)」に取り組む。この活動は、コア活動などを成功裏に遂行するために前提となる知識や技能を補充するもので、例えば「ファンレターの構成を再確認する」や「ファンレターによく用いられる表現が書ける」などが考えられる。

(1. クラスの実態, 2. 本時の位置づけ, 3. 本時の目標, は省略してある。)

#### 4. 本時の展開

指導過程 1 : ..... ( 分)

a. 本指導過程の目標 :

コア	発展
• .....	• .....
• .....	• .....

b. 教師の指導の評価観点 : .....

c. 生徒の学習の評価観点 : .....

d. 指導手順 :

教師の働きかけ	生徒の応答/活動	留意点
• [コア/発展/補強/治療] .....	• .....	.....
• [コア/発展/補強/治療] .....	• .....	.....
• [コア/発展/補強/治療] .....	• .....	.....
~~~~~	~~~~~	~~~~~

e. 板書計画 : .....

f. 配布ハンドアウト : .....

~~~~~

#### 5. 家庭学習

a. コア : .....

b. 発展 : .....

個に応じた指導は Practice の際など、授業のどの場面でも行えるから、「d. 指導手順」の「教師の働きかけ」で、コア/発展/補強/治療活動のどれを行うかを○で囲んで示し、「生徒の応答/活動」欄と合わせて活動を説明する。こうすることで、全体指導に加えて個に応じた指導を行う時間を確保できる。

#### 4 「家庭学習」にもコアと発展を書く

個に応じた指導は家庭学習として課す課題にも及ぶ必要がある。これを指導案に明示して実現するため、「5. 家庭学習」に「コア宿題 (core homework)」と「発展宿題 (extension homework)」の2種類を示し、学習者の習熟の程度に応じてコア宿題のみ、またはコア宿題と発展宿題の両方に取り組ませたい。(例えば、文法事項の復習を家庭学習に課す場合は、前者に教師作成による「基本文法プリント」、

後者に同「発展文法プリント」などと書いて示す。)

#### 5 おわりに

個に応じた指導は、「全ての学習者の可能性を最大限に実現する」という教育の機会均等の理念に基づく。これまで我が国の英語教育は、個人差への対応に一貫した方針を欠き、グラフに表すとフタコブラクダ型になる学力の二極化現象を生んできた。今後は必要に応じて、治療/補強/発展活動を指導案に明示的に書き込み、個に応じた指導を重視する授業を不断に実施して、この二極化現象を解消したい。(本稿中の目標・宿題例は、新潟県立村上中等教育学校(2008)『Super English Language High School 実践の記録 平成17年度～平成19年度』より、同校英語科が開発した「単元カリキュラム」(pp. 81-86)の例を一部引用させていただいた。)



# ライティング・テスト 作成の心得

根岸 雅史 Negishi Masashi  
(東京外国語大学)

## 1. ライティング力を見る観点

今の日本の中学校で求められているライティング力とは何であろうか。この学習段階では、英語のライティングの最も基本的な部分が評価対象となるだろう。したがって、ここには、英語の文字や単語を書く力、文を書く力などが含まれると考えられる。ただし、ここに複数のパラグラフを書く力までが含まれるかどうかは、生徒の実態や設定目標によっても違って来るかもしれない。

入門期のライティングにおいては、文字・単語・文のレベルでの「正確さ」が重視されるのは当然であるが、ある程度学習が進んだならば、「書く量」に目を向けることも重要になるだろう。英語教育では、「正確さ」と「流暢さ」がしばしば重要な概念として挙げられるが、ライティング・テストにおいては「すらすら書いている様子」が見られるわけではないので、結局ある時間内にどれだけ書けているかが、「流暢さ」の間接的な指標になる。もし「正確さ」だけがいつも評価対象となり、この「量」の方が全く評価対象となっていないとすれば、ある意味で、構成概念妥当性に欠ける（本来測るべき能力を測っていない）ということになるかもしれない。

## 2. 和文英訳偏重の影響

中学校の英語の定期試験問題を見てみると、ライティング・テストのレパートリーがきわめて限られていることがわかる。これまでに収集した定期試験を見ると、おおよそ8～9割が和文英訳で、残りが「～について書け」式のいわゆる自由作文である。

和文英訳への偏重が学習にもたらす波及効果を考えてみよう。和文英訳では、書く内容が与えられて

いるので、「何を書くか」や「文章構成」は問題とならない。また、内容が規定されているので、書く長さもほとんど規定されていると言える。もちろん、正確さが重要視される入門期では、正確に書く力を見るための和文英訳テストは便利な手法かもしれない。しかし、これほど圧倒的に和文英訳テストに偏ることによって、正確さと同様に重要な「たくさん書く力」や「何を書くかを考える力」などはないがしろにされている可能性がある。ライティング・テストが和文英訳となっているせいで、指導や学習においても、どれだけたくさん書けるかや何を書くかを考えるプロセスはなくなってしまっている。

## 3. ライティング・テストのレパートリー

どのようなテスト・テクニックでもそうだが、レパートリーが偏れば、テストで見えてくる能力も偏ったものになる。また、レパートリーが少なければ、見ようとする能力と出題方法との相性について改めて考えるということもなくなってしまいうだろう。和文英訳と自由作文の間には、様々な種類の制限作文がある。これらには絵や図を用いた作文も含まれるが、以下ではそれ以外のタイプを紹介する。

### A: 文完成テスト

次の文の下線部を補って、クラスメートに本を紹介しなさい。

This is the book which \_\_\_\_\_.

### B: 単語補充テスト

次の単語をそのままの順番・そのままの形で使い、必要な単語を補って、1文を完成しなさい。ただし全部で8語とする。



photo, taken, famous, photographer  
(解答例: The photo was taken by a famous photographer.)

#### C: 文補充テスト

次の文章の空所を補って、あなたの将来の夢について書きなさい。ただし、空所には文を2つ以上入れてもよい(ここでは、スペースの都合で空所を1行分しかとっていないが、書かせたい分量をイメージして行を設定するとよい)。

I want to be \_\_\_\_\_. Why?  
First, \_\_\_\_\_.  
Second, \_\_\_\_\_.  
Third, \_\_\_\_\_.  
So, I want to be \_\_\_\_\_.  
Thank you.

特定の文法事項が使いこなせるかどうかを見るには「文完成テスト」や「単語補充テスト」、談話構成能力を見るには「文補充テスト」が適しているだろう。様々なタイプのテストをうまく取り入れることで、多様なライティングの能力が見えてくる。

#### 4. 書く目的, 相手, テキスト・タイプ

自由作文にも問題がないわけではない。自由作文は、生徒に「自由に」書かせているのだから、何も悪くないように思える。しかし、たとえば「あなたの好きな本について書きなさい」というようなテストがあるが、このような文章を書くことは現実生活ではほとんどないだろう。なぜこのような文章を書くのかが明らかになっていないからだ。現実生活では、目的もなく何かを書くということはほとんどない。また、このテストでは、誰に向けて書くのかということも明らかになっていない。誰に向けて書くのかわからなければ、何を書くかを定めることは容易ではない。さらに、これは手紙なのか、メールなのか、それ以外のものなのかも明らかになっていない。私たちはこのような「真空状態」で文章を書くことはないのである。

上のような自由作文も、「アメリカにある、あな

たの町の姉妹都市の中学生に、あなたの好きなアニメを紹介するメールを書くことになりました。好きなアニメは何か、どのようなところが好きかなどについて、なるべくたくさん書きましょう」とするだけで、だいぶ違って来るだろう。

#### 5. ライティング・テストの採点方法

ライティング・テストの採点は、大きく「減点法」「全体的採点」「分析的採点」の3つに分けられると言われている。このうち、中学校のライティング・テストの採点で最もよく用いられているのが、減点法だろう。これは出題方法と密接な関係があると言えそうだ。というのは、テストのほとんどが和文英訳であるために、全員が基本的には同じ内容を英語にしており、間違えたところを減点していくという方法がよく機能するのである。

ただ、この方法を自由作文の採点に持ち込むと様々な問題が生じる。そのうち最も大きな問題は、たくさん書けた生徒の点数が少ししか書かなかった生徒より低くなってしまふことである。自由作文では書けば書くほど誤りを犯す可能性が高くなるからだ。したがって、基本的には自由作文のようなテストには「減点法」は用いない方がよいだろう。

となると、自由作文の採点は「全体的採点」か「分析的採点」によることになる。「全体的採点」は、ABCDや5段階などの段階評価であるが、それぞれのレベルがおおよそどのような特徴なのかを書いた level description を大まかでもいいので持っておいた方がいい。単なる印象でつけていると、いつの間にか採点がぶれ、信頼性は低くなってしまふ。

これに対して「分析的採点」は、「内容」「構成」「語彙」「文法」「綴り等」というような観点ごとに別々に評価する。このため、信頼性が高く、生徒にどこがよくてどこが悪かったのかを伝えることができるので、フィードバック機能も高いとされている。ただし、この採点法をとるには、ある程度の長さの文章が書かれていないと意味がない。非常に限られたサンプルから、生徒のライティング力を分析的に見ることになるからだ。また、当然のことながら、「分析的採点」において立てる観点は、指導目標を反映したものでなければならない。

# 「わかる」授業づくり を目指して(2)



## — 「読む力」をつけるための日々の取り組み —

井上 志帆 Inoue Shiho (福岡県川崎町立池尻中学校)

### ① はじめに

前回、「わかる」授業づくりをめざして日常的に行っている、いくつかの実践を紹介しました。それらは完結している取り組みではなく、現在も継続しているものばかりです。そこで、今回も前回に引き続き、授業や家庭学習で取り組んでいることについてご紹介したいと思います。

今回取り上げるのは、英語学習の中でも重要な「読む力」をつけるための実践例です。

### ② 読ませるための準備

いきなり長文を読む課題を出すと、生徒はその量に圧倒され、取り組む前にやる気を失ってしまいます。生徒のやる気を引き出し、学習に取り組ませるためには、英語学習に対する動機づけをし、その基礎となる語彙力や文法力をしっかりとつけることが重要になります。

#### ① 英語を「読みたい」と思わせる

生徒を学習に前向きに取り組ませるには、英語を学習することが現在の日常生活の中で、または将来の自分の仕事や生活の中で役に立つという実感を持たせることが大切だと、生徒の発言を聞いてよく考えさせられます。現在はネイティブスピーカーにALTとして授業に入ってもらえるので、昔に比べて外国の人との交流が多くできるようになりました。それでも生徒は英語を身近に感じたり、自分たちの生活に英語が必要だと実感したりすることはなかなかないようです。すぐに実用性を感じなくてもよい、学ぶこと自体が大切だと、私は思いますが、学習する動機を高めるためには、英語が役に立つという実感をもたせることが必要なことも確かです。

そのためには、英語を読むことで何かがわかった、とか、何かを知り得たという経験を積ませることが

大事だと思っています。英語の歌の歌詞や読み物教材には、短くても興味深い内容がたくさんつまっているのです。そういった文章に向き合わせることで、生徒の興味・関心を引き出し、「もっと自分で読んでみたい」という気持ちにさせることが重要です。

#### ② 語彙力をつける

語彙力は、たくさんの英語を読んで理解していく上で、欠かせない大変重要な力です。もちろん読むときだけでなく、何かを表現する(書く・話す)ときにも語彙は必要なので、しっかりと力をつけておかなければいけません。しかし、ただ語彙力をつけることだけをめざすのは、生徒にとって難題です。どんな学習でも同じですが、語彙力をつけるには時間がかかるので、継続してやり抜く力が必要だからです。また、確実に語彙を定着させるにはくり返して学習することが必要なので、授業中の学習以外にも家庭学習が欠かせません。その点で、家庭学習の習慣がない生徒にとっては、何もフォローがないと語彙学習はさらに難しいものになってしまいます。

そこで私は「英単語練習プリント」を作成し、宿題として出しています。これは、15個程度の単語の意味を調べて書き、つづりを4回ずつ書いて練習するものです。

[2年生の英単語練習プリントの例(一部)]

① building ( )

② find ( )

③ project ( )

これは毎日ではなく、授業の進度によって、また、ほかの宿題との兼ね合いを考慮して出します。そこからさらに練習するかどうかは、生徒の自主性に任せ

ています。そうすることで生徒が進んで家庭学習をする習慣をつけることをめざしています。

そのほか、適宜、テストをするなどして、単語を書く宿題のみで終わらせないようにすることが、より確実に語彙力をつけることにつながっているようです。

また、単語はただ単独で覚えるよりも、英文の中で「意味があるもの」として覚える方がより効果的に覚えられるのではないかと考え、各課で出てくる重要文の中で単語を覚えさせるという取り組みも行っています。たとえば、各ページに出てくる重要文の確認テストを適宜行うことで、重要文と単語を同時に覚えることになります。

これらの取り組みについては、生徒が書かされている、やらされているという意識を持たず、前向きに取り組むようにし向けることが教師側の課題です。

### ③「表現学習プリント」の活用

語彙と併せて身につけなければいけないのが文法です。新出文法項目が出てきたとき、それを「表現学習プリント」としてまとめています。理解をより確実にする助けとして、また生徒が自分で学習するときの見直しができる資料として重要な文法項目をまとめておく有効です。場合によっては予習プリントとして作成し、活用することもできます。



表現学習プリントの例

### ④ 英文の並べかえ問題に取り組む

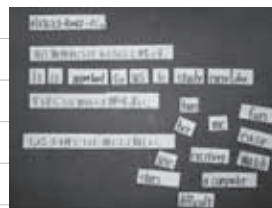
英文を理解するのにもっとも大切なのは「語順を理解すること」です。せっかく語彙力がついたとしても、基本的な語順を理解していないと英文の意味をとるのは難しくなります。日本語と大きく違う、生徒がつまづきやすいところなので、ここはしっか

りと押さえておきたいと思います。

語順を身につける練習として、英単語を並べかえて文を作る練習は有効だと感じます。生徒にとっても、単語というヒントがある並べかえ問題はとっつきやすいと感じるようです。〈It ~ to ...〉構文など、複雑で長くなる文は、特にくり返し取り組ませるとよい練習になります。

並べかえの1つのやり方としては、いくつかの単語をカードにして黒板に貼れるようにし、それを日本語に合わせて並べかえて、正しい文を作らせます。代表者に前に出てきてもらって、黒板に自分が思うように並べかえてもらうのですが、その生徒はもちろん、見ているほかの生徒も、頭の中で並べかえる練習をしているようです。間違ってもいいし、むしろ一度で正しい文にならない方が、生徒がお互いに間違いを訂正し合えて、理解が深められるように思います。生徒は間違えることを嫌がりますが、並べかえ練習だとゲーム感覚でできるようで、間違えうことへの抵抗が少なくなるようです。毎回だと飽きてしまうかもしれませんが、たまにはこういったやり方も取り入れると新鮮でよいと思います。

もちろん、プリントや問題集を利用して並べかえの練習を行ったりもしています。これらは英語を理解するだけでなく、その後の英文文にもつながるよい練習になっていると思います。並べかえ単語カードの使用例



## 3. 長文読解に慣れる

英語に向き合う動機を高め、語彙力・文法力を高める取り組みをしながら、読みの活動に入ります。しかし、いきなりではなく徐々に慣れさせていくことで、生徒の心理的負担を下げるのが大切です。

### ① ミニ英文読解に取り組む

日本語の読解力の低下が指摘されていることにも通じるように思いますが、生徒が苦手とする長文読解を克服させるには、英文を読むことに慣れさせることが必要だと考えています。そのために「ミニ英文読解」の練習を授業に取り入れるようにしています。英語が苦手な生徒は、長文を見るだけでアレル

ギ一反応のように嫌気を感じるようなので、毎時間は無理でも、短時間で取り組める英文読解を継続して行うことを始めました。

3分程度で、40語程度の英文を読んで問題に答えさせ、そのあとに答え合わせをしていきます。まずは慣れることを目的にしているので、今のところは自己採点ですが、この取り組みが生徒に定着したところに、評価を行う予定です。現在は1週間に一度、授業の最初にこの活動を行っていますが、短時間で行うこと、英文が長くないということで、生徒も嫌気を感じず取り組むことができているようです。

これらは高校入学試験に必ず出題される長文読解の対策になる、とも考えていますが、それだけではなく、英文を読むことに慣れることで、自力で英文を読んでその話の内容を理解していくことに少しでも楽しさを感じてくれると嬉しいと思っています。

#### ② 教科書本文を活用する

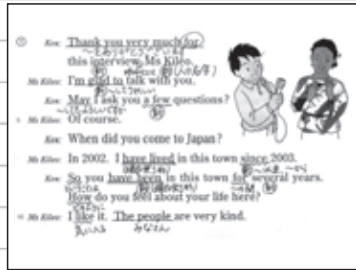
「読む力」をアップさせるため、予習として教科書を読ませ、意味をつかんでくることを宿題として出しています。具体的にはノートに教科書の本文(英文)を写し、本文の意味をできる限り自分で考えさせます。

音声のイントロダクションや、教師とのインタラクティブの中で考えるのではなく、自分で文を読みながら意味をとっていくという作業は、大いに読みの練習になります。また、これは英文の内容理解に挑戦するというだけでなく、家庭学習の機会にすることも目的にしています。

どの程度意味を考えてくるかには個人差がありますが、それは生徒に任せています。そして予習を宿題に出したときは、授業の始めにノート点検を行うなどして、取り組んだ内容に関して声をかけて評価するようにしています。

また、意味を考える上での助けになるように、ヒントを記述したプリントを配布することもあります。生徒には「間違ってもいいから自分で意味を書いてみるのが大切だ」とくり返し言って、うまく訳せなくてもよいので、まずは挑戦してみたいことを伝えるようにしています。なかなか徹底するのは大変ですが、教師側が根気強く取り組んでいこうと思っています。

この宿題を継続することで、予習をしてくことに慣れ、自分から先のほうの内容までノートを書いてく



ヒントのプリントの例  
(NEW CROWN 3 L 2 ①)

る生徒も出てくるようになりました。多くの高校の授業では予習が当たり前で、また英文の量も中学校の教科書とは比べものにならないほど増えます。予習に慣れておけば、高校生になって急にとまどうこともなくなるのではないかと思います。

#### 4. おわりに

英語の長文を読むことは、なかなか手強いことです。英語が苦手な生徒の中には、英語の文の固まりを見ただけで読む気を失う生徒もいます。しかし、入試のことを考えても、英語のおもしろさを実感させるためにも、「読む力」はつけておかなければなりません。そしてまさに長文を読むときに助けになるのが、語彙力や文法力です。すべての単語とはいわなくても、単語の意味がある程度わかれば、読んでもみようかという気になり、それぞれの単語の意味を組み合わせて、自分なりにでも何とか文の意味をとらえようとすることができます。また文法、特に英文の語順が定着していると、より正確に文の意味をとらえることができます。しかし、これらの力は一朝一夕にはつきません。だからこそ、日常的に語彙力をつける取り組みや、文法の定着をはかる取り組みが重要です。授業の中では並べかえの問題も取り入れています。英文の意味を確認するときは、その文の主語と動詞がどれかを生徒に考えさせるようにしています。これらをくり返し行うことが文の構造を理解し、日本語と違う語順を定着させることにもつながると思っています。教師側はこのことを再認識し、継続した取り組みを行っていかなければならないと思います。



# Just Now

## I はじめに

子どもたちは、中学校1年生で英語と出会う。入学当初にはとても楽しそうに学んでいるが、覚える単語の数が増えたり教科書の文が長くなったりしてくると、苦手意識を持つ生徒がでてくる。そのことは、私自身の数年来の悩みであった。英語は、スポーツや音楽を習得すると同様に、繰り返し使いながらじっくりと身につけていくことが望ましいと考え、現在の中学校の学習内容の配列は生徒たちにとって急な勾配になっていると思われる。

南足柄市では、2007年度から3年間、「幼小中の一貫教育」で文部科学省の研究開発学校の指定を受けた。英語教育の充実も取り組みの中に位置づけられ、2008年度からは、小学校全学年で英語活動を行っている。中学校1年生の4月に行っている楽しい活動を小学校の6年間かけてゆっくりと行っていき、小学校と中学校の英語指導をなめらかに接続することができれば、子どもたちの英語に対する抵抗や負担を少なからず軽減させることができるのではないかと大きな期待を持っている。

## II 2007年度の南足柄市での実践

### (1) 英語科推進部会について

昨年度、南足柄市英語科推進部会が設置された。構成員の中心は、小中学校教諭各2名である。議論を重ねながら小中一貫カリキュラムを作成し、小学校英語活動が次のように実施されることになった。

[1・2年生] ビデオとチャンツを中心とした活動。  
週1回15分程度のモジュール(年間11時間相当分)は学級担任が行い、その他年間4時間は、学級担任とJTEとのTTで行う。

## 小中一貫教育をめざした 英語教育の取り組み

関口 清 Sekiguchi Kiyoshi  
(神奈川県南足柄市立南足柄中学校)

[3・4年生] 週1回15分程度のモジュールは担任が行い、その他年間9時間は学級担任とALTまたはJTEとのTTで行う。

[5・6年生] 年間35時間。学級担任とALTまたは小中兼務教諭(次項で説明)によるTTで行う。

なお、中学では、コミュニケーション主体の活動を意識して行うこととした。

### (2) 小中兼務教諭について

2007年度に南足柄中学校の私と、隣接する南足柄小学校の教諭が小中兼務教諭として辞令を受けた。小学校の小中兼務教諭は、マレーシア日本人学校での勤務経験もあり、英語教育に強い関心を持っていたのですぐに意見や考えが合った。私たちは、それぞれ週2日、5・6年生の英語活動を学級担任と行い、さらに週1日、私とともに中学校1年生3クラスの英語の授業を行った。

### 《設置のねらい》

- ① 中学校の英語の内容を意識しながら小学校5・6年生での英語活動の充実を図る。
- ② 「中1ギャップ」と言われる小学校と中学校の段差を軽減することにつなげる。
- ③ 小学校と中学校の教員が交流することにより、互いの教育活動への理解を深める。

また、学級担任が自信を持って英語活動の授業が行えるためのスキルアップの場とも考えた。

### 《小学校5・6年生での実践》

以下の点に留意して授業を行いながらカリキュラムの見直しや教材を開発、さらに1時間ごとの活動案も作成した。

- ① 5・6年生の知的好奇心を刺激し、興味関心を高めるような内容とする。
- ② 「英語は聞けばわかるんだ」と児童が思えるように、英語を聞く活動を中心に据え、そのための場面設定を工夫する。

- ③ 学級担任がすぐに授業で使えるように、詳しい授業展開と簡単な英語を使った活動案を作る。
- ④ 表現活動や対話練習は全員が言うことのできる簡単な内容とする。

5・6年生の活動案の紹介(一部)

ABC コールⅡ・ひもで形を作ろう!

- 1 The ABC song (3分)  
学級担任: Let's sing "The ABC song."  
ALT: That's a good idea. Look at this chart. This is a new one.
  - ① "The ABC Song"を歌う。(「小文字のマス目の表」で文字を確認してから歌う。)
- 2 似ている字をさがせ[小文字] (7分)  
学級担任: Let's compare small letters.  
ALT: That's a good idea.
  - ① 「小文字のマス目の表」を使い、学級担任は形が似ている文字を見つけさせ発表させる。
- 3 ABC コールⅡ [大文字と小文字] (10分)  
学級担任: Next, let's see capital letters and small letters. I will give you a worksheet.  
ALT: OK! That's good.
  - ① 「大文字・小文字シート」「ABC コールシート」を両面印刷したシートを配る。
  - ② ALTは capital letters と small letters を説明し、発音したアルファベットに○をつける練習をさせる。(6～10回程度)  
「大文字・小文字の表」を黒板に貼る。
  - ③ ABC コールの要領で大文字と小文字を結びつけるアクティビティをする。

【年度当初】学級担任に授業を見てもらい、小中兼務教諭どうしてTTを行った。

【7月以降】学級担任と一緒に授業を行うようにした。はじめのうちは、後ろの方にいた学級担任も次第に前に出て積極的に授業をするようになっていった。工夫を加えながら指導する姿を見て、それぞれの持ち味をできるだけ発揮していただけるようなサポートを心がけた。

【10月頃から】学級担任にメインティーチャーとして授業を行ってもらうようにした。

《英語活動出前授業》

2008年度から実施される市内全小学校(6校)での英語活動に向け、小中兼務教諭2人で各小学校

に出前授業に伺い、小学校英語活動のモデル授業を公開した。授業の後の研究会等では活発な討議がなされた。まずは、英語活動の楽しさやおもしろさを見て感じていただき、先生方の不安の解消とモチベーションの向上を図るように心がけた。

《成果と課題》

互いに小中学校の児童・生徒の様子、職員室の雰囲気、指導法の違いなどを肌で感じることができた。また、2人が気軽に小中学校の職員室を歩き来し、他の職員ともふれあうことで小中学校の垣根を低くすることに貢献できたのではないかとも思う。

特に私は、小学校現場の多忙さも目の当たりにし、その中で英語活動をスムーズに導入していくためには、先生方の負担をできるだけ軽くすることが重要だと感じた。また、小学校の小中兼務教諭も、中学校での英語学習の急勾配な学習内容を実感し、小学校で英語を聞くことに十分に慣れさせることや、文字にふれる活動の必要性を強く感じた。

Ⅲ 2008年度の取り組み

2008年4月から市内6小学校すべての学年で英語活動がスタートした。5・6年生については、ALTと私たちが分担して全ての授業を学級担任とTTで行っている。各小学校との連携を密にとり、活動案やシステムの改良を行いながら、現在のところスムーズな活動ができていていると思う。

一方、小学校の学級担任が主導で授業を行っていくために今後どのようなサポートをしていくかは課題である。さらに、小学校英語活動を中学でどのように活かしていくかも検討中である。小学校英語活動の授業を参観した中学校の教諭は、その内容の充実を感じている。それを受けて、4中学校で連携をとりながら、コミュニケーション主体の活動の推進に力を入れているところである。

今回の取り組みを通して最も強く感じたことは、大切なのは「人」だということである。校種間の垣根を取り払い、人と人がつながるのが南足柄市の教育の主眼である。教師も子どもたちも「共に楽しむ」ことをコミュニケーションの第一歩として、今後も連携を深めながら「南足柄の英語」をよりよいものへと高めていきたい。

# Building Friendships in the Strangest Places: Lessons I Learned in Japan

**Robin Sakamoto**

(Rikkyo University)

## Life as an ALT: Early Misconceptions

“Nobody likes me.” I can remember thinking that my first winter as an ALT in a rural area of Japan. I had been teaching for a few months in my school and the “honeymoon” stage where everything was new and exciting was over. I was a little homesick since traditional holidays like Thanksgiving and Christmas had been regular working days in Japan. But I did travel over the New Year’s holiday and came back to school refreshed and determined to try harder to make friends with my English teaching colleagues and our students.

Junior high schools are very busy places and the teachers’ room is always full of students coming and going. However, at lunch time, most of the teachers would leave together. The school nurse, Vice-Principal and I would be the only ones left in that vast empty room. Our school lunches were left on our desks by students. For me, this was the most depressing time of day and I can remember struggling to eat food that I didn’t recognize in total silence.

Based on my own cultural upbringing in the US, I assumed that the students were eating lunch in the cafeteria and that the teachers were going into town for lunch at their favorite coffee shop. How I wished the teachers would just once invite me to go along with them for lunch! But they never did. So based on my experience alone, I concluded that they didn’t like me and thus didn’t ask me to join them. And as the winter got longer, I felt lonelier and lonelier.

One day, I finished lunch in solitude and decided to bring the teaching materials to my 5th period class a bit early as I had many things to carry. Can you imagine how surprised I was to find the classroom full of students eating lunch? And at the head of the classroom was one of my English teaching colleagues! I was shocked!

That day was the last day I ate lunch alone and the beginning of many wonderful memories of teaching English in Japan.

## Learning about Japan: Students as Teachers

As soon as my English teaching colleague returned to the teachers’ room, I asked him why he had been eating lunch in the classroom. He explained to me that homeroom teachers eat with their students. I asked him if it would be possible for me to go in his place. He was thankful for the opportunity to have some time to work at his desk and the very next day I started to eat lunch with the students.

It was wonderful to finally learn what I was eating! The students would gesture and use their dictionaries to answer all my silly questions. I ate *natto* for the first time and *tororoimo*. After lunch, the students would share with me the music they listened to and the books they read, and I would bring in things from the US. We really enjoyed this time together to get to know one another and the students became my teachers of Japanese culture.

Other homeroom teachers heard about this and soon I was going to a different classroom each day for lunch. I had a lunch schedule on the board and students would come to the teachers’ room to escort me to their class with great pride.

I realized through this experience that friendships can be fostered anywhere — even a school classroom. My initial misconception caused me to feel lonely but the teachers and students had no idea how I felt or why. It was only through chance that the situation turned into such a wonderful experience. Now in a new situation, I always try to think first of what cultural expectations I carry and then look for opportunities to explore ways to integrate into the new culture.

## Visual Imageの活用

— PowerPoint®でプレゼンを—

杉本 薫 Sugimoto Kaoru  
(東京都立両国高等学校附属中学校)

中学校の英語の授業で使われる教具にもプロジェクターやパソコン、電子黒板などデジタル化の波は押し寄せている。ここでは、そういう環境を前提に、PowerPoint®を使ったPresentation(プレゼン)の手法を授業で活用することを提案し、自分の実践からいくつかポイントになることを説明したい。

### 1. まずイメージをつかませる

Visual Imageを使う利点は、英文が持っている情報(内容)を説明することなく、話者が伝えたい内容をイメージとしてそのまま提示することにあると思う。生徒は分析して理解するというよりも、画像全体を受け止める。これはうまくいけば、ほとんど一瞬の効果だ。もちろん的確な画像が必要だし、余分な情報、例えば文字などは、可能であれば、使わないぐらいの覚悟も必要だ。

例えば、受動態。まず、きれいに片付けられた教室の写真を示す(写真1)。この場面は“This classroom is cleaned every day.”という英文を発信しようとする人の心の中のイメージであると説明する。そして、“This classroom is cleaned by students.”のように、別の角度から見ている人のイメージとして、同じ光景の片隅に生徒の顔や掃除している姿を追加する(写真2)。この2枚の写真はby ~のある受け身とby ~のない受け身の違いを、画像の情報量から対比して表している。

### 2. 配列は受け手の意識の流れを考えて

スライドショーを使う場合は、この機能が送り手から受け手への一方通行のものであることを理解しておきたい。こちらが用意した順番で再生されていくもので、一度開始されれば展開の順番をその場で臨機応変に変えていくというのは難しい(SMART



写真1

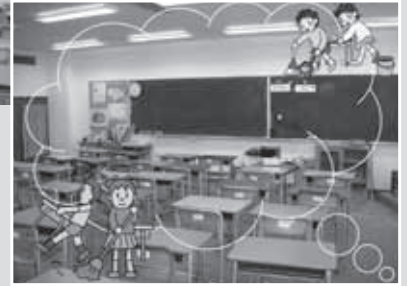


写真2

board™などの電子黒板ソフトを使えばこれも可能ではある)。となるとその配列は、そのままわかりやすさの重要な規準になる。発話のスクリプトを作るときに生徒の意識と集中が途切れないようなスムーズで自然な展開を用意することが大切だ。

Oral Introductionでは、使える英語の制限とわかりやすさの点から、やはりVisual Imageのメリットを生かしたPicture Cardや黒板に絵を描きながら話を進めることが多い。ここでもPowerPoint®を使ったプレゼンの手法が効果的だ。メリットとして考えられるのは次のような点である。①素材の加工が容易であること。②提示方法が多彩であること(ただし、シンプルなものの方が効果的とアドバイスしておく)。③スライドの配列の調整も容易。④保存と再利用、再編集が容易。⑤情報を整理し、確実に提示できる。うっかり忘れることも、不必要に繰り返すこともない。生徒の顔を見ながら、口頭で与える情報は加減できる。⑥最後に「生徒によるOral Presentationの再現」という次の言語活動の導入にもなることなどが考えられる。

### 3. 文法事項の説明もプレゼンで

文法事項を英語で説明するようなことも可能だ。この場合にも、文法用語を上手く回避できれば、説明そのものがOral Interactionとして機能して、英語学習の大きな素材になる。例えば、僕は「現在完了形の説明」は、①英語で、大まかなイメージをつかませる、②日本語で、文法用語も使いながら詳細に説明、③もう一度英語で復習というように、同じスライドを使って3回ほど行っている。Visual Imageはそれだけでも強力だが、繰り返しの使用でさらに定着を目指すことができるだろう。



## NEW CROWN ENGLISH SERIES 2 New Edition (平成 21 年度用) 修正箇所のお知らせ

平成 21 年度用の教科書から以下の箇所を修正いたします。どうぞよろしくお願い申し上げます。

| ページ     | 行          | 原文                        | 正  |
|---------|------------|---------------------------|--|
| 95      | 中段<br>27 行 | hand [hænd] 手.            | hand [hænd] 手.<br>by hand 手で.                        |
| 100     | 左段<br>7 行  | I see. [会話で] わかりました, なるほど | I see. [会話で] わかりました, なるほど.<br>you see あなたも知っているとおあり. |
| 付録<br>1 | 右段<br>39 行 | little (小さい)              | little (少量の)   |

## 好評発売中

### 自己表現力をつける英語の授業

斎藤栄二 著 2,100 円 (税込)  
四六判 192 頁 ISBN 978-4-385-36353-0

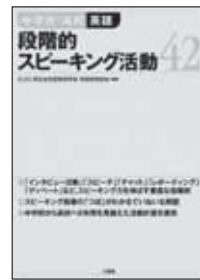


自己表現の語彙の増やし方, 質問の作成能力のつけ方, Discussion の仕方, Read and Look up の仕方など, 実践を踏まえてやさしく具体的な手順を示す。好評の前著『基礎学力をつける英語の授業』の続編。

中学校・高校 英語

### 段階的スピーキング活動 42

ELEC 同友会英語教育学会  
実践研究部会 編著 2,415 円 (税込)  
B5 版 208 頁 ISBN 978-4-385-36355-4



「インタビュー活動」「スピーチ」「チャット」「レポート」「ディベート」など, スピーキング活動についての指導技術や 42 の事例を紹介。既習の知識を活用して「話す」力を育む指導に!

### TEACHING ENGLISH NOW

14 号

2009 年  
1 月 29 日発行  
定価 80 円  
(本体 76 円)

編集・発行人: 八幡統厚  
発行所: 株式会社三省堂  
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14  
電話 (03) 3230-9422 (編集)  
振替 東京 00160-5-54300  
[NEW CROWN ホームページ]  
<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>  
印刷: 三省堂印刷株式会社  
〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9  
電話 (0426) 45-6111 (代)

### 編集後記

三省堂は, Web「三省堂英語教科書・教材 SANSEIDO ENGLISH」(URL <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown/index.html>) にて, 今後も, 授業をサポートする資料 (年間指導計画表, ワークシートなど) や英語教育に関する情報 (コラム, 研究会情報など) を掲載していきます。

# NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition 1 2 3

基礎力をつける生徒用教材 [ 学校採用品 ] の紹介

## 【文型・文法，語彙の力をつける教材】

### ワークブック 1 2 3

B5判（別冊解答付き）オールカラー  
各学年 88 ページ 学校納入定価 580 円（本体 552 円＋税）

- ◆各セクションに語彙・文型・語法などの基本練習を，各課に総合問題を配置。
- ◆それぞれ見開き 2 ページ構成。左ページに文型の要点解説と定着練習・語句の整理を，右ページに各種ワーク問題，自己表現の作文問題を配置。



### ドリルブック 1 2 3

B5判（別冊解答付き）  
1年 64 ページ 2・3年 56 ページ  
学校納入定価 420 円（本体 400 円＋税）

- ◆各課の文型・文法を基礎から発展まで集中的にドリル学習する練習帳。
- ◆各セクションの基本文について，1 ページ 1 項目の基礎ドリル練習と，各課に 2 ページ構成の単語・ドリルおよび発展ドリルによって構成。



### 補習ノート 1 2 3

B5判（別冊解答付き）  
各学年 88 ページ 学校納入定価 200 円（本体 190 円＋税）

- ◆英語の習得が比較的遅い生徒を対象とし，基礎・基本の定着を図る。
- ◆教科書の基本文を中心に，「読む」「書く」作業を通して英語の文に慣れることに主眼をおいた練習帳。1 項目につき見開き 2 ページで構成。



## 【リーディング力をつける教材】

### ジョイフルリーディング Step 1 Step 2

B5判  
各 STEP 40 ページ 学校納入定価 400 円（本体 381 円＋税）

- ◆楽しく読んで読む力を伸ばせる，多彩な読み物教材を収録。
- ◆STEP 1 は 2 年前半まで，STEP 2 は 3 年までの文型・文法事項を目安に。



基礎からやり直す，英語を楽しむ。  
学習英和のエース，新登場！

# エースクラウン

ACE CROWN ENGLISH-JAPANESE DICTIONARY

# 英和辞典



投野由紀夫 [編]

定価：2,835円(税込)

総頁：1,888頁(巻頭カラー96頁を含む)

判型：B6変型判

収録項目数：英和 約50,000,和英 約23,000

カナ発音付き，2色刷

巻頭カラー  
96ページ！

中学の復習ができる  
「学習ページ」

コーパスを駆使！

最重要語を  
徹底解説する  
「フォーカスページ」

和英総項目  
2万3千！

類書中最大の  
「和英小辞典」  
付き

語法・受験に強い！  
現代英語に強い！

# WISDOM

しかも，進化するウェブ辞書が無料で使える！

ウェブ版英和は全見出し語にネイティブの音声付き。また，英和・和英ともに，  
教材作成・英作文に便利な新ツール「用例コーパス」を装備（一般公開中）。  
詳しくは，<http://www.dual-d.net/>へ。

ウィズダム英和辞典 第2版

井上永幸・赤野一郎 [編]

[並装] 3,465円(税込) [革装] 5,250円(税込)

ウィズダム和英辞典

小西友七 [編修主幹]

[並装] 3,465円(税込) [革装] 5,460円(税込)



## 三省堂

<http://www.sanseido.co.jp/>

本社

- 大阪支社  
 名古屋支社  
 九州支社  
 札幌営業所

〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14 TEL. 03 (3230) 9411 (編集案内)・9551 (営業)  
TEL. 03 (3230) 9422 (英語教科書編集部)

〒530-0002 大阪市北区曽根崎新地 2-5-3 TEL. 06 (6341) 2177  
〒460-0008 名古屋市中区栄 3-25-43 瑞穂ビル 4F TEL. 052 (252) 9211・9212  
〒810-0012 福岡市中央区白金 1-3-1 TEL. 092 (531) 1531・1532  
〒060-0042 札幌市中央区大通西 15-2-1 ラスコム 15ビル 2F TEL. 011 (616) 8722